琴線　令和四年

森野　水琴

夜もふけて　耳そばだてる　静けさに
　雪の白さも　窓に映らむ

人しれず　眺めしままと　気がつきて
　心の窓に　ささやきかけむ

異国へと　窓を開きて　聞きながら
　はるか遠くに　想い寄せなむ

雨の音　窓越しに聞く　夕暮れに
　明日は晴れよと　ひとり祈らむ

窓を打つ　雨の音にも　驚きて
　まだ明け初めぬ　空を眺めむ

天も泣き　ひとすじの雨　舞い降りて
　心の泉　琴を奏でむ

この雨は　天と心を　結ぶ水
　渇き潤し　よみがえらせむ

白い紙　黒い文字　無限の世界　したためむ

言の葉が　天から降りて　くるように
　すらすらと　ただ　すらすらと　したためむ

天から降りた　言の葉を　したためて
　声に出しては　天に届けむ

美と書いた　つもりが何故か　いまひとつ
　線が足りずに　なおも励まむ

美しきもの　美しいと言う　あなたこそ　美しい
　それが分かる　私もまた　美しい
それだからこそ　私たちは　美しい
この輪広げて　皆美しき　世になることを
　ひたすら願う

心こめ　したためてこそ　美しい
　文字に寄り添い　更けていく夜

美しき　文字で書かれた　知識ゆえ
　真似て書いては　渇き潤す

美しく　したためられた　言の葉を
　書き写しては　沁みさせむ

いてつく空に　陽が射して　暖かくなり　はずむ言の葉

また一つ　異国の人の　言の葉を
　学び始めて　ともに励まむ

そよぐ風　木の葉を奏で　揺れながら
　ささやくように　耳を潤す

名も知れず　流れる川の　せせらぎに
　耳を傾け　しばし　たたずむ

澄み渡る　夜空に光る　月見れば
　我が心にも　沁みる言の葉

さても　この　弥生の美空に
　仲睦まじき　ふたりの　今日は　お披露目
願わくは　とこしえに　互いの魅力を
　心いくまで　引き出し給え

夏までの　楽しみとせよ　伊予の味
　暖かき汁　知る人ぞ知る

待ち焦がれ　夏まで待てぬ　伊予の味
　満たしたあとの　茶と楽しまむ

懐かしき　器に蒸した　きょうの品
　我を忘れて　味わうほどに

暑き日に　よみがえるのは　伊予の味
　懐かしみつつ　心なごまむ

窓に射す　陽のまばゆさに　ときめいて
　新たな朝を　きょうも迎えむ

天に祈る　言の葉が舞い　羽衣を
　まとう天女も　ほほえみ行かむ

したためた　ふみのゆらぎに　なごみつつ
　そこはかとなく　夜も更けなむ

海へだて　異国の島を　眺めれば
　間近にせまる　恐れにも似て

風に舞う　波の華こそ　咲き誇れ
　つかの間にとは　思わぬほどに

やわらかき　筆の運びに　酔いながら
　したためていく　時のまにまに

窓辺にと　寄り添う人の　面影に
　懐かしみては　秋も暮れなむ

声出さず　言の葉のみを　響かせて
　聞こえるがまま　ただしたためむ

秋の夜を　しおり片手に　ほほえみて
　ふみ読まむかな　果てるともなく

響く音　したためた本　読みながら
　しおり握りて　ゆらぐ心を